



カール・ヤイトラー

オーストリアのグラフェンバッハ生まれ。8歳よりピアノを、12歳から伯父の手ほどきによりトロンボーンとユーフォニアムを始める。1965年から1973年までのウィーン国立音楽大学在籍中、1969年にはウィーン・フォルクスオーパーで演奏するようになる。その後、ウィーン交響楽団を経てウィーン国立歌劇場に移籍、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団団員として2012年までの38年間在籍し、世界中で演奏活動を行う。「ウィーン青少年吹奏楽団」、「ウィーン・トランペットコア」等を創設、その指揮者も務める。1991年より札幌での「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」(PMF)に講師として参加。また、浜松市においてウィーンの音楽を中心に様々な音楽教育及び音楽事業も展開している。1997年には「ウィーン・アンサンブル11」を創立し、その代表も務める。2010年より信州国際音楽村で「上田=ウィーンアカデミー」音楽監督を務める。

フィルハーモニカー・ウィーン・名古屋 (PWN)

当団は2011年3月に、ウィーン式管楽器をこよなく愛する中京地区のアマチュア・オーケストラのメンバーを中心に設立され、ウィーンの響きや音楽性を理想とした演奏活動を行っています。現在、管・打楽器は団員全員が世界最高峰とされるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と同一の独特な型式のものを使用しており、その美しい響きを追求するオーケストラは、プロ・アマ通じて日本で唯一のものであります。団員は10代から70代まで日本全国から幅広く集まっており、2012年12月にブルックナーの交響曲第9番をメインとする第1回演奏会を開催しました。2013年8月のウィーン楽友協会黄金の間におけるベートーヴェン《荘厳ミサ曲》他の演奏会や、昨年1月のヴァイオリン、ヴィオラやピアノの協奏曲4曲を集めた特別演奏会など、積極的な活動を展開しています。ヤイトラー氏との共演は昨年5月の第2回演奏会に引き続き2回目となります。現在、当団のコンセプトに共感し、団員になって下さる仲間(弦楽器、管・打楽器)を募集中です。詳しくは下記当団ホーム・ページ等をご覧ください。

HP <http://pwn.onushi.com/index.html> FACEBOOK <https://www.facebook.com/PhilharmonikerWienNagoya>

森の唄が聞こえます。春のヨーロッパの森や林に行くと、コマドリやツグミが賑やかに鳴き交わしているのを聞くことができます。時折聞こえてくる教会の鐘とのコラボは、まさに典型的なヨーロッパの音風景といえましょう。若きマーラーは、歌曲《さすらう若人の歌》の中で、「朝の野辺を歩けば、小鳥や釣鐘草が挨拶をくれる」とファンタジーいっばいに描写しました。故郷のイグラウ(現在のチェコ共和国イフラヴァ)の森の風景が重なります。この旋律が交響曲第1番第1楽章に引用されていることはよく知られていますが、森は青春の甘酸っぱい思い出も葛藤も優しく包み込んでくれたに違いありません。彼が学び、後にその音楽

界に君臨することになるウィーンにも、あまりにも有名な森があります。とりわけその一角は“クラブフェンの森”と呼ばれ、今も市民の憩いの場となっています。同名のシュトラウスのポルカはもともとはロシアのハヴァロフスクの森の印象によるものですが、ウィーン子に親しみのある曲名に生まれ変わって一層愛されるようになりました。森は、母なる川ドナウとともにこの町の象徴です。そして、我等がヤイトラー氏の故郷グラフェンバッハもまた、豊かな森に囲まれた美しいところです。日本の森も愛してやまないヤイトラー氏の棒からは、自然の息吹溢れる瑞々しい響きが紡ぎだされることでしょう。

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13番2号 TEL(052)971-5511 (代表)

愛知県芸術劇場
コンサートホール

地下鉄 東山線または名城線「栄」駅下車徒歩3分
名鉄 瀬戸線「栄町」駅下車徒歩2分
(いずれもオアシス21から地下連絡通路または2F連絡橋経由)
自動車 名古屋高速東新町出口から3分
(お客様専用の駐車場はございません。愛知芸術文化センター地下3・4・5階の一般駐車場等をご利用下さい。)

